

スケバン刑事 コードネーム=麻宮サキ

2006(平成18)年7月26日鑑賞〈東映試写室〉

★★



監督=深作健太/原作=和田慎二/出演=松浦亜弥/石川梨華/竹内力/三好絵梨香/岡田唯/窪塚俊介/斉藤由貴/長門裕之 (東映配給/2006年日本映画/108分)

第8章

やっぱりお子様向け？

……お子様映画(?)まで、と思いつつ、やはり「あやや」こと松浦亜弥が四代目スケバン刑事になる(?)と聞き、これは観ておかなければと楽しみにしていたが、やはり所詮コミック……? 謎のサイト「エノラゲイ」によるゲーム感覚の爆弾遊び(?)や聖泉学園内でのいじめというテーマは、いかにも今風だが、そんな中、四代目麻宮サキはどんな活躍を……? あややの母親役を初代スケバン刑事、斉藤由貴が演じているのを見ると、20年の歳月の重みがひしひしと……。

はじめて観たスケバン刑事—あややが四代目—

和田慎二原作の『スケバン刑事』は、私もその名前を知っているくらいの、延べ2000万部の発行部数を誇る人気コミックとのこと。しかし、それはかなり昔の話……。スケバン刑事の初代は斉藤由貴、二代目は南野陽子、三代目は浅香唯が演じたとのこと。

そういえばそんな感じはするが、パンフレットを読むと、それは1985~88年にかけてたて続けに製作されていたもの。したがって、そんな「名作」が今回甦るのは、TVシリーズとしては20年、劇場版では18年ぶりになる。

スケバン刑事四代目を今回演ずるのは、私もよく知っている(?) あややこと松浦亜弥。そして、その敵役はかつて私の大好きだった「モーニング娘。」を2005年5月に「卒業」した石川梨華。20年前のTV版を含めてこんな映画を観るのははじめてだが、さてどんな物語、そして面白いの……?

🎬 アングラサイトの「エノラゲイ」とは……？

スケバン刑事の「コンセプト」は、そのタイトルどおり、セーラー服のかわい子ちゃんがスケバン刑事となり、「てめーら、許せねえ！」（初代）、「おまんら、許さんぜよ！」（二代目）、「おんしら、許さんかいね！」（三代目）という決めゼリフを吐きながら、見事なアクション(?)を披露し、悪を懲らしめるというもの。そこで今回のワルは、「エノラゲイ」というアングラサイトを操るナゾの黒幕、騎村時郎（窪塚俊介）という設定。彼はあの大ヒット作『DEATH NOTE（デスノート）』（06年）と同じようなすべてをゲーム感覚でとらえる若者で、今の世相を色濃く反映したもの……。

この「エノラゲイ」は自殺の方法から爆弾のつくり方まで「指南」しているうえ、悪いうわさの絶えない「聖泉学園」に潜入していた特命刑事が身体にセットされていた時限爆弾で爆死するという事件を引き起こした黒幕……。

🎬 聖泉学園での「いじめ」の中心は……？

「聖泉学園」という校名を見ればいかにもお嬢サマ学校のようなのだが、『着信アリ Final』（06年）などと同じように、その中ではいじめが蔓延しており、これも今ドキの風潮どおり……。そして、いじめグループのボスが秋山レイカ（石川梨華）で、いじめによる1年前の犠牲者が神田琴美（三好絵梨香）。そして、現在のターゲットは今野多英（岡田唯）。

暗闇警視（長門裕之）と特務機関担当官の吉良和俊（竹内力）による半強制的な「手口」によって、スケバン刑事麻宮サキに任命されたのは、ニューヨークから日本に強制送還された少女、K（松浦亜弥）。既にしっかりと身につけている「凶暴性」に加えて、麻宮サキ特有の(?)赤いヨーヨーを武器として、聖泉学園に転校生として彼女が潜入(?)してきたのは、「エノラゲイ」にまつわるいじめや爆死事件を捜査するため。仲間と群れることを好まないサキは転校1日目から目立った存在となり、多英を助けたことをきっかけに少しずつ捜査が進展するかのように見えたが……。

所詮コミック、と思うものの……

この映画の売りの1つが、サキとレイカとのヨーヨーを駆使した「美女対決」であり、またそこに至るまでのスケバン刑事の「武闘派的な活躍」ぶり。しかし、その内容は今ひとつ……？ 『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』（03年）における、ブライド VS 石井の日本刀による太刀回りや、ブライド VS ゴーゴータ張のゴーゴボールを振り回すケンカ殺法との対決は、そりゃ迫力のある面白いものだった（『シネマルーム3』131頁参照）が、それに比べればその格差は歴然で、所詮コミック……。

自分をそう納得させようと思うのだが、残念ながらなかなかその納得は容易ではない……？

GAM とつくく♂は……？

「モーニング娘。」から一人立ちした歌手で私が1番好きだったのは後藤真希だが、その関連(?)に藤本美貴やあややがいる。その藤本美貴と松浦亜弥が組んだユニットが Great Aya & Miki の略称で「GAM (ギャム)」。そしてこれは、英語(俗語)で「脚のきれいな女性」という意味を持つとのこと。

この2人が歌う主題歌と挿入歌をつくったのは、もちろんあのつくく♂。その出来は決して悪くはないのだが、やはり劇場版映画としてもう少し団塊世代のおっさんも納得できるような内容にしてほしかったと思うのだが……。ねえ、深作健太監督……？

2006(平成18)年7月27日記